シリーズ

葬送儀礼の問題を考える

第1回　問題の所在

そこで、本願寺仏教音楽・儀礼研究所「法式研究会」より、本誌面において、規範では扱っていない葬送儀礼の諸問題について、儀礼的な側面より解説すると同時に、地域差のある葬送儀礼について、皆さまの意見を広く聴取し、共に考えていく場にしたいと思っております。

『葬儀規範解説書』の発刊について

このたび、『葬儀規範』の解説書が発刊されることとなりました。この解説書は、昨年刊行された『葬儀規範』に則し、その内容について依用経典の解釈など、教学的見解を中心に編纂されています。しかしながら、伝道の最前線に立っておられる僧侶の皆さんや門信徒の皆さんから、規範に載っていない事項の問い合わせが多くあることも事実です。というのも、現在、葬送儀礼の場で問題となっている事柄は、時代性を背景としたもの、あるいは習俗との関係などが大半を占めており、教学的理解では収まりきらない上に、現場では臨機応変な対応が求められているからです。

葬送儀礼の場で起こる諸問題

葬送儀礼の場で起きている諸問題のうち、たとえば「清め塩」に関しては、ここ数年で全国的に用いない方向へと向かっております。これもひとえに、基幹運動の取り組みに基づく、僧侶の皆さんの啓発活動の成果と言えましょう。この清め塩のように、葬送儀礼の諸問題は、ご当地色豊かな習俗にまつわる事柄が非常

に多く、伝道の最前線に立つ僧侶方による啓発活動、地域社会への理解浸透、葬祭業者との共同などが鍵となります。特に、真宗寺院が少ない地域での啓発活動は、一筋縄ではいかず、地道な努力が重要となりましょう。

では、『葬儀規範』などによって浄土真宗の葬儀形式が定められているにもかかわらず、どうして地域による違いが生じるのでしょうか。メディアが報じるように、僧侶の資質に問題があるのでしょうか。確かに、伝道の最前線に立つ僧侶が、批判の矢面に立たされるのは致し方ないことかもしれません。また実際に、伝道方法に問題が生じているケースがあることも否めませんが、それについては『宗報』(二〇一〇年六月号、一一～一三頁)に譲り、ここでは、僧侶が葬送儀礼について曖昧な対応とならざるを得ない事情に言及したいと思います。

◆葬送儀礼の構成要素

葬送儀礼とは、実は、私たち宗派宗教から見ると〝習俗〟と呼ばれるものから発生しており、教学的に説明しきれない部分が数多くあります。厳密に言えば、宗教者が存在しない葬送儀礼が先行していたところに、後から宗教が関わり、教義的な意義付けをしていったということです。また特に、過去の一般的な葬送儀礼においては「葬式組」と呼ばれる地域共同体が、「看取り～埋葬・供養」を取り仕切っており、僧侶が関与しないケースも多くありました。従って、この全ての過程を教義的要素のみで説明することは、到底無理だとわかるでしょう。

よって、現代の葬送儀礼とは、世俗的な儀礼と宗派宗教的な儀礼が混在したものを意味します。

◆性格の異なる儀礼がもたらす僧侶の混乱

現場で起こる問題の大半は、真宗儀礼と〝習俗〟と呼ばれる世俗儀礼の境界線上に集中しており、皆さんからは「〇〇は浄土真宗の葬儀で行ってよいのでしょうか」という類の質問が多く寄せられます。実際、規範に載っていないことをご門徒さんから質問されると、不安になる僧侶も少なくはないでしょう。そして、その不安は〝ご法義から逸脱していたら……〟という一点に帰結すると思います。

もちろん、ご法義に則していなければ、浄土真宗的ではありません。しかし、こと葬送儀礼に関しては、先述のとおり、真宗以前、さらには仏教公伝以前から継承している要素があり、それらと真宗儀礼が一体化したものであることも事実です。

このような葬送儀礼を、真宗の立場から説明しようとする時、論点は次の三つに分けられます。

①真宗教義によって、後付けの解釈が可能な要素
②明らかに、真宗教義に反する要素
③真宗教義では説明できない要素

①は真宗儀礼として厳修し、②に対し

ては、毅然とした態度で臨むべきでしょう。問題は、③の事例です。真宗教義では触れられていない要素に関して、どのように対応するかです。換言すれば、真宗教義では触れられていないとして切り捨てるか否か、が問われているのです。

真宗教義で触れられていない要素の存在を、教義から逸脱するものとする立場がある一方で、教義では触れられていないだけで否定すべきではないとする立場から、世俗儀礼を人の死を悼む行為として受容する見解もあります。私たち僧侶は、このようなデリケートな問題に対する判断を、日々の現場で任されているのです。僧侶の皆さんが困惑するのも、無理のないことです。

しかし、答えの出ない問題として放置するわけにもいかなくなってきました。今、世論は、宗派宗教的な見解よりも、〝人の心に寄り添う僧侶力〟を求めています。繰り返しになりますが、ご法義は大切なものです。しかし、葬儀を行う全ての人が、すでに真宗門徒というわけではありません。愛しい人を亡くし、葬儀という特殊な状況ではじめて浄土真宗とであった場合を考えなければならないでしょう。そのためには、従来の教学的理解とは異なる視点から、葬儀を捉える必要があります。

そこで次回より、葬送儀礼の歴史的経緯を踏まえながら、いかにして浄土真宗の葬送儀礼が現行の形へと整ってきたのかについて、説明していきたいと思います。

（本願寺仏教音楽・儀礼研究所常任研究員　多村至恩）

※タイトル部分の図は徳力善雪作「親鸞聖人絵伝」第八幅（本願寺蔵、部分）。

本願寺仏教音楽・儀礼研究所
ニューズレター第11号『仏教儀礼』

全寺院への配付を取り止め、ご希望の方にお送りいたしております。

（頒価無料）

教学伝道研究センター

TEL 075－371－9244
FAX 075－371－5761